

楯山親方（元関脇・玉春日）に 「相撲道」を聞く

「礼に始まり礼に終わる」相撲 挨拶と礼儀作法を後進に指導

中央大学相撲部出身の元関脇・玉春日関が、昨年9月場所で現役を引退し、年寄楯山を襲名した。約15年の土俵人生に区

切りをつけ、親方として後進の指導にあたっている。その指導理念の第1に、「礼に始まり礼に終わる」礼儀作法と、社会に出ても通用する人間の育成を掲げる。現役時代の突き押し相撲そのままに、真面目で誠実な人柄が行き着いた「相撲道」だ。これまでの相撲人生を振り返りながら、「人間・玉春日関」に迫った。



学生記者取材班

—— きょうは、部屋（片男波部屋）でお話を

うかがえるのを楽しみにして来ました。5月30日に両国国技館で「玉春日引退・楯山襲名披露大相撲」を催される前のお忙しい時期にインタビュー

をお受けいただき、ありがとうございます。楯山親方がこれまでに相撲を通じて学んできたことを中心に、お話を伺いたいと思いますので、宜しく

お願い致します。

まずは、相撲をはじめたきっかけから聞かせてください。

父親の勧め小4ではじめた相撲
大嫌いで、テレビ見るのもイヤ

楯山親方 始めたのは小学校4年で、周りの人

に勧められたんです。両親、特に父親が相撲が大好きでしたので。私は大嫌いで…。痛いし、苦しいとか辛い。裸になるのがイヤ。でも無理矢理やらされたような感じになって。もともと気が弱かったですから、断れないんですね、嫌って。

—— そんなに相撲が嫌いだったんですか？

楯山親方 もう嫌で嫌でたまりませんでしたね。どうやってやめようか。どうやって練習やらなくていいか、そんなことばかり考えていました。例えば、小学校の練習時間にサボって行かなかったり。仮病ですよ（笑）。でも嘘つけないたちで、腹が痛いとか、風邪引いたとか言っても通じないですよ、演技が出来ないから。結局「大丈夫だろ」と言われると、しどろもどろになってばれてしまふ。相撲を見ないんですよ。昔から。

—— えっ。テレビでも見ないのですか？

楯山親方 はい。夕方はマンガがあるから、そっちの方が見たい。でも親が好きだから仕方なしに相撲を見た記憶はありますが、何て面白くないスポーツだろうと思っていました。待ったをするし、見ていて面白くない。どっちかというところ、見ている面白くない。どっちかというところ、レスの方が興味がありました。

—— それでも中学に入っても相撲をやらされました。

楯山親方 田舎の中学校ですから部活動も少ないですね。剣道、柔道、相撲ですね。男子ですと、中学校はとりあえずやりました。

—— 高校は愛媛県立野村高校ですね。

楯山親方 高校からは違うことをやりたかったんですよ。ラグビーをやりたいかった。で、野村高校も行きたくなかったんです。相撲やらなきやいけなくなるっていうのが頭にありましたから、とにかく相撲から離れたい。でもやっぱり親が許してくれないですよ。相撲部に入らないなら高校に行かせない」と言われました。

先輩後輩の関係で礼儀作法学ぶ

練習に明け暮れた高校時代

—— それもお父さん？

楯山親方 そうです。はい。いま、思えば感謝ですね。そういう怖い存在っていうのがあったから、自分は道を外さずに済んだってことはありますね。

高校になると、縦の社会というか、先輩後輩の関係を勉強しました。礼儀作法だったり、挨拶だったり、嘘をつかないとか人に迷惑をかけてはいけませんとか、厳しく言われました。

縦の社会っていうのは、目上の人、年上の人に敬意を表するっていうことです。1年生だと、先輩がいますから、敬語をつかわなければいけない。ただ、先輩から自分が嫌な思いをさせられたことは、後輩たちにはしない

「まず礼儀作法から」と楯山親方

縦の社会っていうのは、目上の人、年上の人に敬意を表するっていうことです。1年生だと、先輩がいますから、敬語をつかわなければいけない。ただ、先輩から自分が嫌な思いをさせられたことは、後輩たちにはしない

たまかすが・りょうじ 年寄名・楯山良二。本名・松本良二。1972年1月7日、愛媛県野村町（現西予市）生まれ。中央大学法学部卒。94年初場所幕下付け出しで初土俵。最高位は関脇。幕内在位67場所。金星7個。通算603勝636敗39休。十両優勝1回。殊勲賞1回、敢闘賞2回、技能賞2回。

ようにしましたね。

どちらかというと中学も高校の監督も、頭から押し付けるのではなく、自主的にやりなさいっていうタイプの監督で、自分でやらなきやいけないんだ、ということを教えられました。その中でも礼儀作法は厳しく指導していただきましたね。

—— 礼儀作法はどのように？

楯山親方 例えば挨拶ですが、とりあえず頭を下げるだけじゃなくて、きちんと相手に正対して、「おはようございます」と言って頭を下げ、そしてもう一度、相手の目をみる。これは大学で教えてもらったんですけど、必ず相手の目線に合わせてなさい、ということですね。相手が座っているのに、こっちが立って話をするんじゃない、屈んで相手の目線で話をする。そういうことも厳しく教えられました。

—— 高校に入ってからには、少しは相撲が好き



になりましたか。

楯山親方 いや、好きにはならないですね。嫌でしたね。

—— 嫌な理由は小学校のときと変わらないんですか。

楯山親方 また違ってですね。厳しいのは我慢できるようにはなりませんが、休みがないんで



「相撲は嫌で嫌で」と

すね。毎日夕方は練習。日曜は朝から晩まで練習

です。夏休みには大会がある。みんなは遊びに行ってる、というのに……。いわゆる青春時代って言うんですかね、そういうのはなかったんですよ。

—— 1年中そういう生活ですか。

楯山親方 そうですね。当時、春日館道場（松山市にある相撲道場）に下宿していたんですが、日曜日や休みだからといって「帰つていよ」と言われない。何でか、と言うと、家に帰るとやっぱり里心がつくんです。家に帰ってしまうと家の方が楽だからもう行きたくなくなるわけです。ですから1年に帰れるのは、盆と正月の計1週聞くらかったです。

「道場に帰れ」と突き放した母 厳しかった両親にいまは感謝

—— 高校1年の夏休みに1回だけ家に帰られていますね。

楯山親方 そうです。そうです。

—— その時、親方は学校が始まるのに春日館道場に帰りがらなかった。お母さんに「何をグズグズしているのか。早よ、行きなさい！」って怒鳴られたそ

うですね。

楯山親方 ありました。ありました。やっぱり家に帰ってしまうと、もう道場に帰りたくなくなるんですよ。ホームシックですよ。初めて親元離れて生活するわけですから。やっぱり、恋しいっていうか、寂しいんですよ。今まで当たり前のようにご飯の仕度とか洗濯とか、いろいろ身の回りのことを親にやってもらっていたのが、離れてしまうと自分でしなければいけないわけですね。先輩の洗濯とかもしないといけない。そういう厳しさの中で、親元を離れるっていうのが一番辛かったですね。

—— お母さんが毅然として、帰した訳は何なのでしょうか。

楯山親方 やっぱり愛情ですね。当時は、何てわからない親だろうと思っただけですよ。俺はこんなに苦しいのに、普通だったら「帰ってこい」って言うだろうに、と思っただけなんです。今となれば、「厳しいことに耐えなさい。今、我慢しなきゃ駄目」だということを教えてくれていたんだな、と思います。

—— 帰されなければ、相撲をやめていたかもしれないですか。

楯山親方 終わっていたかもしれない。でも、

田舎ですから、やめて帰ると、「何なの、あそこの子は」とか、「やめて帰ってきたらしいよ」とか、そういうことで親に迷惑かけたくないっていう気持ちもあつたんですね。

気持ちがこつちに動いたり、あつちに動いたり、我慢できたり、できなかったりするわけです。1年生のはじめのころは、何回も家に電話したことがあるんですよ。「やめたい。帰らしてくれ」って。でも「駄目だ。絶対家に入れない」って言われました。

—— 厳しいご両親でしたね。

楯山親方 はい。厳しくされなかつたら、今の自分は無かつたでしょうね。ろくな人生歩んでないでしょう。相撲を途中でやめてしまふわけですから。本当に両親に感謝ですね。

—— お父さんとお母さんは、相撲の試合はよく見に来られていたのですか。

楯山親方 見に来てほしくなかつたですね。はい。断っていたんですが、来ていましたね。東京の国技館であつた中学の全国大会も見に来てくれました。試合は見られるのは、嫌でした。緊張しますよね。あと、練習は見て欲しくなかつたですね。稽古場で稽古するときは、極限まで先輩方に鍛えられましたし、泥だらけになつたところは見

せたくなかつたですね。

中3で片男波部屋に誘われる 高卒後、なりたかつた警察官

—— プロからの誘いはあつたのですか。

楯山親方 ありました。中学3年生のときから、片男波部屋にずっと入らないかかって言われていました。プロとアマチュアが対決する大会、というお祭があつて、その時に、今の片男波親方が初めて師匠になつたときに来られて、「入らないか」と声かけられたんです。その時、ありがたかつたのは、父親が「プロには行かせない」って言ってくれたんです。「中学卒業では行かせない」と。

—— 親方は目立つて身長も大きくなく、体重も重かつたわけではないのに、どうやって中学生で大相撲の親方から誘われるほど強くなつたのですか。

楯山親方 何で強く?といわれると、やらされることをこなさないといけないと思つたからです。与えられたことをやらないと、怒られるっていうそれじゃないですかね。それと「お前やつたのか?」とか「やらなきゃ駄目だろ」って言われるのが嫌なんで、言われる前にやるということでした。はい。

—— 自分の意思で相撲を頑張つていこうと考えるようになったのはいつごろからですか。

楯山親方 本当に相撲をやつていこうと思つたのは、大学3年生くらいですね。

—— 大学に入った当初も、やめたい気持ちはあつたんですか。

楯山親方 ありました。高校1年で縦の社会を知つて、3年になると、自分が上だから楽になる。それが大学1年になると、また1からスタートなんです。今度は4年生まであるわけですから。

でも大学の場合は、田舎から東京に行けたっていう楽しさっていうんですかね。高校の相撲部は部員が少なかつたですが、大学では1学年に5人はいましたから、そういう中で苦しみながらも楽しさっていうのがありましたね。

—— 中央大学へ入つたのは、先輩がいたから楯山親方 そうですね。本当は高校卒業したら社会人になりたかつたんです。大学に行くどと学費かかるので親に迷惑かけなくなつたのと、もう相撲やりたくなかつたんですよ。ですから警察官を志望してたんなんです。そういうことを言つたら、

「警察官になるなら大学卒業して行けばいいじゃないか」と、こうなつたわけです。

—— どなたにそう言われたのですか。

楯山親方 春日館道場の兵頭（洋和）さんという方。館長さんです。これはまずいなと、今さら警察官は嫌でしたとも言えないし、それで大学へ行くことになるんですよ。

大学で理解したタテの社会 プロの序列は入門順にシヨック

—— 大学に行ったことで、大相撲をやっている上で役に立ったこととか、いい経験になったこととかはありますか。

楯山親方 それはですね、何事も段階を経ていかない、見えてこないことがあると思うんですね。もし私が中学卒業でプロに入っていたら、途中でやめていたと思うんです。逃げ出していたかもしれないですね。

それが高校、大学で経験して縦の社会っていうのはこういうもんだ、という免疫力が出来るくる慣れですよ。プロへは、ある程度、縦の社会というのを理解して入ったわけじゃないですか。だから途中で挫折せずに続けられたと思います。

そう甘くないっていうのはもちろん分かかって入っていますし、大学卒業だからといっても、稽古場で幕下にもなかなかな勝てるものじゃないっていうのも分かっていました。そういう厳しさを理

解した上で、大相撲に入ったから良かった。大学卒業で私は良かったと思います。

あとはアマチュア界っていうのは目上の人を立てる。年齢じゃないですか。ところがプロは入った順なんですよ。ですから私は22歳で入って、15、16歳の人が先輩になるんです。

—— 番付の地位によるのではないですか。

楯山親方 いや、十両までは関係ないです。私が一番シヨックだったのは、その入門順でしたね。15、16歳の人に「おい、松本（本名・松本良二）」って言われて、私は年下の先輩に対して「さん」付けで言うのが、辛かったですね。年下が年上に敬語を使うのが当たり前なのに、大学まで行って入ったプロは全く違ったわけですから。だから、自分のプライドを全部捨てることからスタートしました。俺は大卒だとか、思っていたんじや、無理で、このやり方でやるしかない、と。心の中では今に見ているよ、とは思っていましたけど。はい。

—— 大相撲には覚悟して入られた？

楯山親方 プロに行こうと思ったのは、私の1つ上の先輩がプロに行っていて、「あれくらい出来るんだったら俺も」というのと、春日館道場の兵頭さんに「まあ駄目だったら駄目で帰ってくれ

ばいいじゃないか」と言われたのがきっかけですね。

あと、後悔したくなかった。角界に入るということは、若いうちしか出来ないですよ。自分で失敗して納得してやめたかった、というのがありましたね。成功するよりも、自分はどことんやっで駄目になって納得してやめればいいじゃないか、という気持ちの方が強かったですね。

36歳の引退まで危機感ばかり 「努力でやっと人に追いつける」

—— 納得して相撲をやめたことから、大相撲に入ったのですか。

楯山親方 はい。そうなんです。最初から俺は成功するなんて夢にも思っていないですから。1日1日、それが現実ですよ。自分は、まだまだだなあ」と思いながら、運良く十両、幕内に上がって活躍してこれたんですよ。

その中でも、いつ終わりが来るかも分からない、とずっと危機感を抱いていました。24、5歳からずっと。もしかしたら来年終わるかもしれない、と考えるながら、36歳までとれたんですよ。

—— 現役時代の「玉春日関」は、「努力の人」と言われていました。ご自身ではどう思われます

か。

橋山親方 自分は、努力だと思えます。才能とか素質があったわけでもなかったんで、一生懸命やって、やっと人に追いつけるくらいだ、とずっと思っていました。見えないところでやらないと、

それはできないと。

ましてやライバルといわれた武双山（現藤島親方）、土佐の海は、高校、大学からずば抜けていましたから、超えるってことは無かったですけれども、追いついて同じ土俵に立って戦うには努力

しかない、と自分は考えていました。

—— 見えないところで努力する、ですか。

橋山親方 はい。それは、土俵だけではなくて、トレーニングだったり、そういう部分ですね。朝、稽古して、昼、休憩して、夕方、トレーニングに行くんですね。やってもやらなくていいんですけれど、22歳でプロに入っていますから、時間がないわけですよ。生活の一環としてトレーニングを考えていました。やって当たり前。別に特別変わったことをやっているとは思ってなかったですね。

—— 自分からトレーニングに通うようになったんですか。親方に指示されたんじゃないですか？

橋山親方 そうです。はい自分が。

—— それは負けたくないっていう気持ちですか？

橋山親方 その時は、そうですね。どうやら、強くなれるか、そういうことは四六時中考えていましたね。相撲のことばかり。

—— 見えない努力と、ひとつのひとつ積み重ねの過程があつて、はじめて目標に到達することができるといいますか？

橋山親方 やつぱり、現実はそんなに甘くないですよ。最悪な事態を考えて、物事に取り組みますね。駄目だった場合はこうだけど、じゃあこうしよう、って考えます。ですから、必ず目標は立てますよね。

でも、必ずしもその目標通りには行かないと思うんですよ。そこで目標と多少ずれがあつたとしても、納得できる自分でいたいなと思います。自分の目標には近づかなかつたけど、ここまで出来たんだ、という。それがありませんね。

相撲が嫌だつた、好きじゃなかった、という気持ちがあつたことで色々なことを勉強させてもらった、っていうことですね。

**やるからには絶対逃げない
勝敗だけじゃない「相撲道」**

—— 最悪の場合を想定している、というのは凄いと感じました。

楯山親方 なんて言ったらいのかな…。主役になるタイプじゃなかったんです、昔から。どちらかという控えめで、気が弱く、自分が1番になろうとはあんまり思わないですね。結果的にそうなるのはいいんですけど、最初からそういう願望はないんです。

「欲がない。だから勝てないんだ」とよく言われたんですけど、やるからには、とことんやる、という気持ちはあるんですよ。だけど、最初からよし、頂点を登りつめてやろうとか、そういう風には取り組まないです。

—— 絶対成功してやろうみたいな、そういう気持ちは？

楯山親方 そういうことは思わないです。やるからには逃げないでやるんだ、ということですよ。ある意味、負けず嫌いではあるんですけど、あんまり表立っては出ないですね。内に秘めるっていうか、そういう感じですね。

—— 親方は現役時代に、相撲に負けたときでも、きちんとインタビューに答えられるのを見込んでですけど、それは意識されていたのですか。

楯山親方 意識していました。だって、やっぱり人に対して失礼じゃないですか。相手は聞きたーいと思って聞いているのに、自分の感情で嫌な顔

する、のはですね。逆に自分がそういう立場で接しているのに、嫌な顔されたら嫌じゃないですか。ましてや、そんな強い方でもない自分に聞きに来ているわけじゃないですか、それに対して失礼っていうのはありましたね。

—— 親方として、どのように後進を指導されるお考えですか。

楯山親方 相撲道というのは勝ち負けだけじゃない、つてことですね。人間を磨いていくところだと思えます。だから、例えば、身体を鍛えるのは、苦しさの中で心を、精神を鍛える、というところが1番に来なきゃいけないと思うんですね。最近では、なんでも結果だけを評価しがちだけれど、必ずしもそうじゃないよ、ということですね。

何事もそうだと思うんですけど、その過程、プロセスの中で色々なことを勉強するようになる。結果がもし出なかったとしても、自分が一生懸命やってきたことに対して自信を持つことだと思うんです。上手くいって物事が何でも成功してしまつと、失敗したときには、自分でなく、人のせいにしたがつたりすると思うんですね。ですから、自信っていうのは、失敗の積み重ねでつくものだと思いますね。

ですから相撲道を通して、「礼に始まり礼に終

わる」礼儀作法を教え、そこから社会に順応できる力士を育てる。私はそれを目指しています。

若い力士には「正しい道」を人に好かれることが基本

—— 素敵ですね。

楯山親方 いえいえ。自分が経験して得たことです。自分は人に助けてもらって今がある。それをまた若い力士たちに道標というか、正しい道はこうだ、ということを伝えてあげたい。

その中には、やっぱり愛情っていうものが必要だと思っんですね。やさしさだけじゃない。厳しさの中のやさしさ。それが指導するにあたって大事なことの1番かなって思っていますね。

—— 玉春日関はなるべくして親方に、指導者になられたと感じました。これまで相撲をやつてこられたのは、親方になるための勉強だったと…。

楯山親方 そうかもしれないですね。自分は、現役時代は準備運動だと思つてきたんですね。いい勉強させてもらいました。これからは本場の勝負だと思つていられるのです。はい。

—— 親方は、どんな本を読まれるのですか。

楯山親方 本はあんまり読まないですよ。だけど、人が言ったことで気に入った言葉は、書き留



稽古場には「技練心磨」の掛け軸が

めておきます。なるほど俺の言っていることは、間違っていないとか、これはいい言葉だな、とか。

—— 大相撲界は、どうしても視野が狭くなりがちではないかと思うのですが、親方がお弟子さんたちに対して相撲を強くするだけじゃなくて、社会に出たときに順応できるようにするとか、視野を広く持つように教える、そういうった考えを持たれたのは、どこから来るのかなあ、と思ったので…。

橋山親方 やっぱり大学行って学んだことです

ね。プロの世界も知っていれば、アマチュアの世
界も知っている、っていうことですね。私が横綱
になつていようと、アマチュアの先輩からは「お
い松本」っていわれるでしょう。それはいい教えっ
ていうか。だから、ただ強ければいいというもの
じゃない。

—— やっぱり、人に好かれる、喜んでもらうのが基
本だと思えます。そうする為には、まず挨拶であつ
たり礼儀作法であつたりだと思えます。

—— お話を聞いていると、親方は節目節目で、

いろいろな人にアドバイスされてきたように思
います。

橋山親方 そうです。そうです。だから自分の
考えで進んでいたら、今の自分はなかったでし
うし、全く違う世界にいたかもしれないですね。

—— 人の話によく耳を傾ける？

橋山親方 人の言うことをよく聞くというのは
あつたかもしれないですね。自分の言い分を言
うんじゃなくて、相手の言い分を聞くという。そ
ういうスタイルですね。それで、良い指導者にずつ
と恵まれてきたんだと思います。人生を左右する
良い人に巡り会うことができたのが、1つのポイ
ントですね。

—— きょうは、いろいろ勉強になる話を聞か
せていただき、大変ありがとうございました。こ
れを機会に、みんなで橋山親方を応援していきま
す。ご活躍を願っています。

(このインタビューは2月6日、片男波部屋で行
いました)

学生記者取材班

上田雄太(文学部4年)／野村茉莉亜(商学部3
年)／石川可南子(法学部2年)／橋本あずさ(法
学部2年)